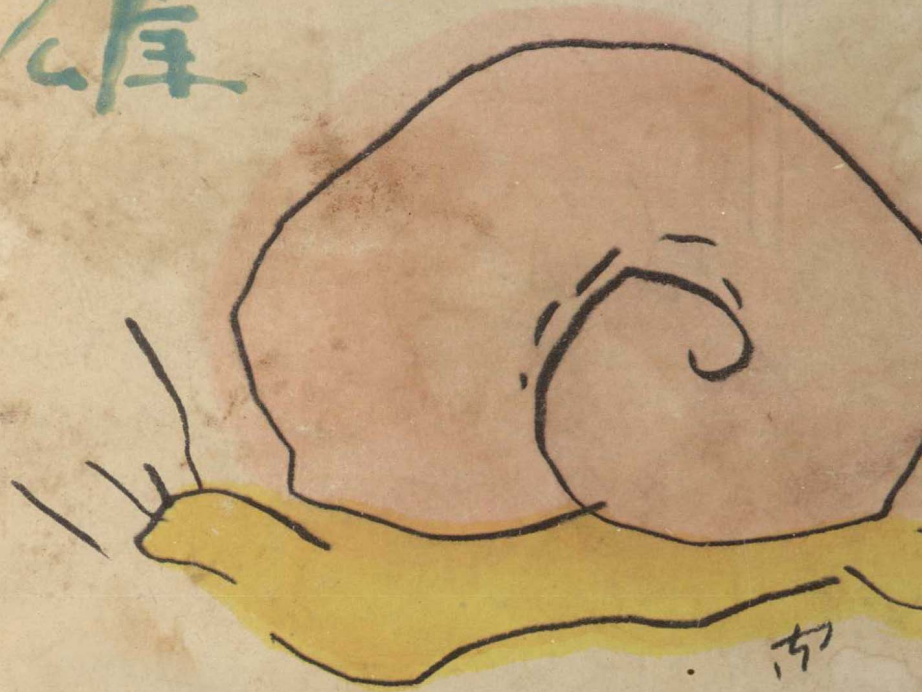


母回手

檀一雄



南

母の手

檀一雄

皆美社

母の手 著者 檀一雄

発行 昭和四十五年三月十五日 発行者 関口弥重吉

発行所 皆美社 東京都千代田区神田神保町二ノ二十一

電話 東京二六四―三九〇五 振替 東京一四八〇二二

印刷 千修 製本 関山製本 定価 一〇〇〇円

目 次

女 と 花 火	ザ ボ ン の 家	幼 年	母 の 小 説	母	母 の 手
------------------	-----------------------	--------	------------------	---	-------------

一 三 九	一 一 三	九 一	五 九	三 一	七
-------------	-------------	--------	--------	--------	---

大 遭 難

一五七

落 石 記

一九一

大 当 り ラ ッ キ ー ス ト ラ イ ク

二一三

あ と が き

二二四

檀さんの修羅の母胎 真鍋呉夫

二二五

装幀
熊谷
守一

母
の
手

檀
一
雄
作
品
集

母
の
手

母についての最初の思い出というのは何であろう。自分の記憶をたぐりよせて、分明の時を逆さまに際限なく追い求めていっても、母に関する最初の思い出というのは、至って稀薄である。さまざまの印象や、記憶に残る若い日の母の面影の細片を、昔へ、昔へと選び篩っていても、それが私の眼に映じた最初の印象だとはっきり断定出来るような母の姿を思い浮べることはむずかしい。

ただ、これが母の姿——と云い難いならば——すくなくとも私を護るものがあるという、おぼろげながらも母の雰囲気を感じさせた最初の出来事の記憶はひとつある。

悪童が二歳の私の眼に向って発砲した。といっても、そんな情景を決して憶えているわけではなくて、眼の中が突然真暗になっただけである。私は勿論泣き叫んだに相違ない。その時私の体をゆすぶり続ける、いうに云われぬ優しい生命の庇護者があるという事をぼんやりと感じたことを覚えてゐる。それは有形の母の声でも姿でもなかった。そこに縋り得ると云う僅かに仄かな愛情の方向を感じ取っただけのことである。従つて、おぼろな生命の原始の昏迷のうちから、私がようやく外界を意識し、自分を意識した最初の記憶は母の愛情につながるものであった。

後日私はこの話を母と語り合つた。

「そんなことを貴方が憶えておいでの筈はありませんけれど」

「でも兎に角眼の中が真暗になって、母さんが抱いてゆすぶってしてくれたことをはつきり覚えてゐるのです」

「もし覚えておいでだとしたら、それは近所の子供が玩具の鉄砲に灰をつめて、貴方の眼を狙つて撃つたのですよ。あの時は、本当にもう貴方が眼をなくすかと思ひました。でもそんなことを貴方が憶えておいでだなどと思ひ議でなりません。やっと立上つたばかりの二つの時のことです。後で誰からか話を聞いて、それを思い出すではありませんか。そうです

よ。きつと——」

と母は不審そうに私の顔を見た。或はそうかも知れなかった。けれども、私はこの出来事を母と語り合うまでは、悪童の発砲だとは知らなかった。私は事件を記憶しているのではなくて、不思議な感覚ばかりを憶えているのだから、其の日の出来事の正しい追憶に間違いないような気持がする。

母の愛護に盲目的に縋っていた——おそらく私と母とを結えて全く一つの私の部分だと信じていたような時期を超えて、やがて私は母というものが私の外にあって、私に全然知られぬ様々な大人の不幸に喘いでいるのだということを学んでいった。

山蔭の谿のほとりに咲き乱れる、百合の間に腰をおろしながら、母が空を仰いでいたのである。いや、それほどはっきりとした情景が眼に浮んでくるわけではない。百合の花輪と、その花輪のように白く揺れる母の泣顔があるばかりだ。この情景だけ、その頃の母の顔に不思議な実感がこもるので、今でも母の顔を眺めている時に、ふいに百合の中のその母の泣顔が、今の母の輪廓の上に二重撮しになる。

人にはこのような不思議な経験は無いかも知れない。けれども私にとって母は、七歳の秋から、再会する迄の二十三歳の春迄と、十五年を超える空白の時間があるのである。

母と会うてうれしや窓に梨の花

とその再会の日いつわらぬ喜びを私は手帳の隅に記しとめた記憶がある。

もう一つ。これははっきり母の思い出と限定するわけにはゆかないが、日暮里の借家の二階の窓から「雄飛号」の飛翔の姿を眺めていた。帝都の赤く染った入陽雲の間に、夕陽を浴びてこの軟式飛行船が、ゆっくりと飛んでいた姿は、今思っておこしても飛抜けるばかりに美しい。あれは大正四年であつたらうか。——それとも五年のことであつたらうか。考えてみるともう既に私の幼年の夢は生活の波にさらわれかけていた。父が失業していたのである。その場に父が居合わせなかったのはおそらく金をもらいに郷里の祖父の許にでも帰っていたのであらう。

私は家の二階の手摺にもたれて、母にしっかりとつかまえられるながら、大空に浮んでいる「雄飛号」の雄姿を眺めていた。その眺めていた気持の状態だけが今でも不思議に克明な記憶として残っている。満ち足りない、それでいて憧憬を遠くに放つ美しい美しい追憶である。もし旅情というものがおのれの貧しさとみじめさを知って、その悲哀を遙かな空のなかに托するのだとするならば、ただしく、そのような旅情をはじめ知ったのかも知れなかった。私達がそこへ棲まなければならぬ卑小な人間の限界と、その限界を超えて壮嚴にうちひろ

がる悠久の空への畏怖のころであった。

二

おなじくこれも日暮りに住んでいた頃の思い出だと思うのだが、私はよく母に伴われて、陸橋の上からわびしい夕べの汽車を眺め送った。煤煙によれた崖の勾配に、色の褪せた雑草類がまばらに匍つて、車の灯りがゴウゴウと遠ざかってゆく有様は、妙にいらだたしい哀愁の氣持を幼年の私の心の中にかきたてた。

其日は烏打帽にステッキ姿の父も、黙って私達の先を歩いていた。丁度妹を懷妊していた母が、坂道を上りながら何かにつまずいた拍子に、ふりかえった父からはげしく打擲された。都会の場末のよごれた樹々の夕闇の中である。貨車の遠ざかる音がいつまでも私の耳の中に残っていた。

私はその父の激怒の理由が何であつたかは勿論おぼえていない。一途に母だけが不幸であつたとも思わない。寛大であれということは絶望にひしがれよというような、人々のみじめな生活の時期の極くありふれた情景である。

私の両親が離別した理由については、後日私の父から繰りかえし聞かされた。そういう離別後の双方の云い分を別としても、幼年の私は私の父母をひき離していった大きい神の意志に従って、いかにも従順であった。私は人々を結えてはほぐすこの見えない神威の力を畏れるとともに、はやくから、人々のもっともらしい口吻に信をおく心を失った。

両親の膝下で送った私の幼年の日の思い出というものは、数え上げてみてもこれくらいのものである。山梨の桂川のはとりで生を享けて、四、五歳の頃東京に転住した。その東京の借家住いはおぼろな私の記憶を辿っても半年か一年で畳まれて、父母は私を母の実家にあげたまま弘前へ移り住んだのである。

三

筑後川の支流が右に折れて、椎の森と苺の熟れる野原をくぐる。そのほとりに、私の母方の祖父母が住む野中の大きな別荘があった。榆や棕や巨大な楠が庭いっぱいを蔽って、辺りを包む孟宗の竹藪が、^{うわみ}蟒の青い腹を冷く湿らせながら絶ゆることなく光りざわめいていた。私はいつも私の少年の頃を顧る度に、市井の雑踏と困憊にあえぐ、今日の少年達のみじめな